

堅田合戦における

島津勢敗走の原因を探る

林 寅 喜

(会員 佐伯市中の島)

はじめに

去る二月十七日、第二回文化財現地研修会が堅田・青山方面を中心に行われ三十余名が参加した。その際石打公民館で小休止のあと、天正十四年(一五八六)十一月、佐伯勢千九百人と島津勢三千五百人が激突して戦った堅田合戦の経緯と戦況について、概要図を掲示し説明がなされた。内容は大友興廃記に基づいたもので勝敗の様子は理解出来た。しかし、城攻めと違い野戦の場合兵力の差で勝敗が決するとまでいわれた戦国時代に、彼我の兵数が概ね一対二と勝つていた島津勢が、奇襲されたわけでもなく正面から戦ったのになぜ破れたか、その原因についての説明はなかった。

そこでこの疑問の解明と、もし島津が得意とした『釣り野伏せ』の兵法を用いた場合の発想について、私なりに思うところを書いて見た。

合戦の経緯(興廃記より)

天正十四年十月梓峠を越えて豊後に侵攻した島津勢は、先ず宇目郷の朝日岳城をはじめ諸壘を掃討してこれ等を手中に収め、松尾山(三重町)に壘を築いて拠点とし、梅牟礼城に兵を進めて十一月二日、先陣は切畑に着陣して和睦の使者を送り込んだ。迎えた佐伯方は謀略によってこれを番匠淵(檜野と高島の間)に突き出た山鼻に誘い、一行十八人を討ち取った。

翌三日轟峠を越えて大越に侵入した島津勢は、四日岸河内に放火して府坂峠を越え、大越川を挟んで城八幡山前と汐月にかけて長蛇の陣を布した。(図一)

対する佐伯勢は中山峠を本陣とし、城八幡山に先陣を配して鉄砲を撃ちかけ、山を駆け下りて大越川の辺りで槍を合わせて戦うこと数度、防戦叶わず島津勢は川を渡つて江頭まで退いた。すかさず佐伯勢は因尾衆を泥谷口に回して岸河内口に備えさせ、一隊は迂回して鶴山の

古城に進撃し、側面から追い討ちをかけた。その間本陣を波越峠（泥谷の後方）に進め、(図二)長池付近に後退して反撃に出た島津勢と戦つて府坂峠に追い上げ、(図三)泥谷口の因尾勢と呼応して長瀬原に敗走させた。

島津勢敗走の原因（興廃記に私見を交えて註釈）

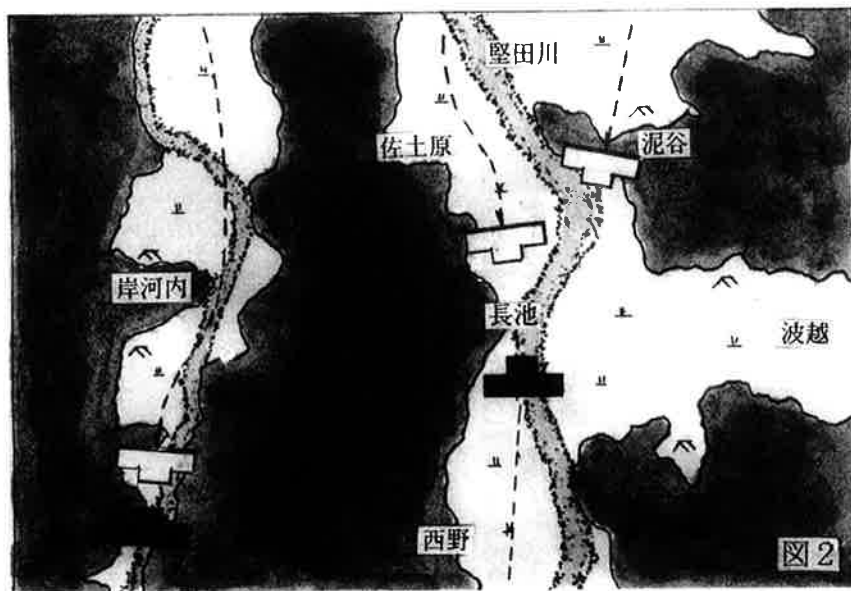
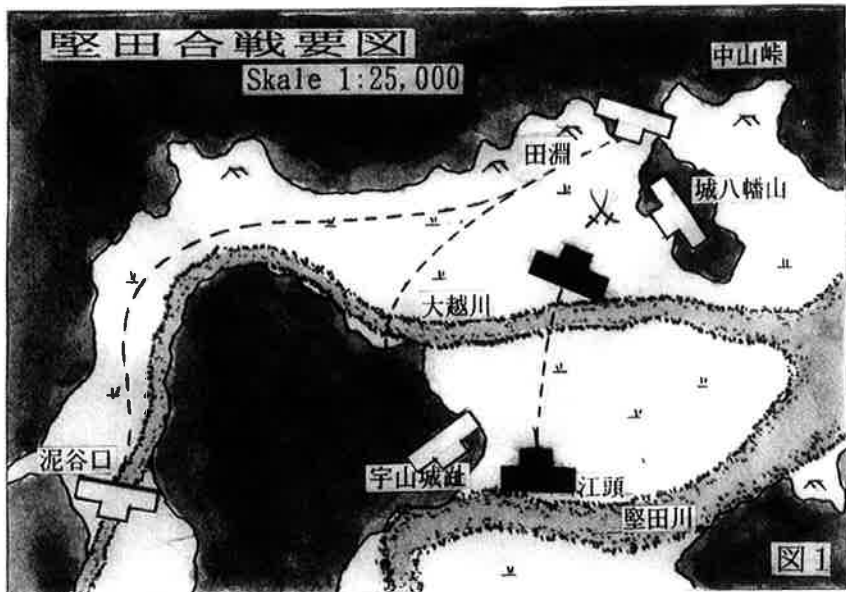
十一月三日、三千五百余の軍勢を率いて大越に侵入した島津勢は、翌四日早朝岸河内に放火して焼き払い佐伯方に挑戦した。この煙を見た榎牟礼城では常の火災ではないとして直ちに陣触れし、千九百余の軍勢を中山峠に差し向けた。一方、島津勢は物見の知らせによつて堅田口を進路と定め、兵を割いて岸河内口の守備に就かせ、三千余を率いて府坂峠を越え堅田に進出し、大越川を挟んで城村・汐月へ二段構えの陣を布いた。翌五日朝霧の晴れるのを待つて進撃開始したが、佐伯方は既に城八幡山へ駒を進めて対峙していた。やがて先陣が田淵にかかったところで鉄砲の撃ち合いとなり、大越川辺で鎗を合わせ、押しつ押しされつて戦うも川が禍い（註）して退くにも退けず、後陣は前進を阻まれて戦場は混乱し、一先ず江頭まで敗走したものの反撃出来ぬまま、長池辺

に至つて漸く陣を立て直し、激戦すること数度であった。その後は佐伯方の作戦に翻弄されて敗走し、府坂峠に追い詰められて行つた。

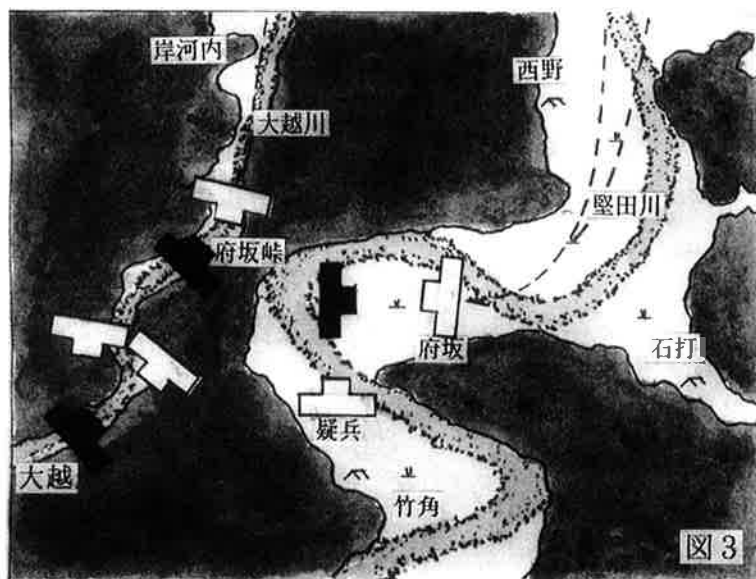
合戦は緒戦から陣形の立て直しが出来なかつた作戦の不幸際と、大越川と堅田川が禍いしたことが敗北の原因と考へる。

【註】当時の河川は流れに任せて土手には藪や樹木が生い茂り、いたる所に淵や深みがあつて川幅は一様ではなく、場所によつては今の倍近くもあつたと思つたが、見通しも悪く渡る場所も限られる。そこへ敗走の大軍が押し寄せた場合混雑は計り知れず、深みにはまつて水死する者が有つたことも事実であろう。

府坂峠の下は堅田川の水衝部すいしゅうぶに当たり、山肌はえぐり取られて淵となつており、これを攀登とびのぼることは不可能であつた。恐らく当時ここを越す峠道は西野側の地下外じげれから急な斜面の小径（註）を登つて峠に上がり、長瀬原と岸河内方面に通じていたと思ふ。そんな小径を大勢が先を争つて敗走すれば、戦の死者より川に転落して水死



した者の方が多かったろう。興廢記という死傷者一千五百というのも強誇張ではなかったと思う。



【註】昭和三十年代、この小径を山村振興対策事業により、幅三メートルに拡幅する工事が行われた。しかし、理由は記憶にないが、四、五年で中止になった経緯がある。

島津の御家芸『釣り野伏せ』の兵法

島津勢が最も得意とした野戦に『釣り野伏せ』の兵法というのがある。陣立ては八の字を逆にした陣形で要の部分に本陣を置き、両翼には伏兵を前面には先陣を配して敵と対峙し、合戦では四となつて敗走と見せかけ、退きながら誘い寄せて両翼が側面を衝き殲滅するという兵法で、去る天正六年（一五七八）の高城戦（日向児湯郡）では、大友軍が小丸川を渡つたところで側面を衝かれ、佐伯氏をはじめ大友の諸将が多く討ち死にした。

また、天正十四年のこの年十二月、戸次川原の合戦でも同じ兵法で長曾我部信親が討ち死にし、四国・大友の連合軍は千二百人の戦死者を出した。

この合戦で『釣り野伏せ』の兵法が

用いられた場合の考察

この合戦で『釣り野伏せ』の兵法を用いた場合の陣立

では、先ず本陣を泥谷の山裾に置いて大越川と堅田川の中間（汐月・江頭間）付近に先陣を構え、佐土原と市谷に両翼の伏兵を置いて佐伯勢を誘い寄せ、堅田川を渡り切ったところで先陣が反転し、両翼が側面を衝けば高城戦の時と同じ戦況となるのは必至と考える。（図四）

この兵法を用いた場合、島津勢は何度も川を渡る必要がないことと、岸河内口が突破されない限り退路を絶たれる心配もないから、有利に戦えたと推察する。只作戦上宇山の古城趾は確保して置く必要があったらう。

発想の原因

この合戦を推理した理由は去る平成十年五月、十人の有志と高城戦跡を訪れた際、城趾から戦跡を眺めた感じが宇山城趾から見たそれと余りにも類似していたことを思い出し、発想して推敲した次第である。

一方、堅田合戦でこの兵法が用いられなかった最大の原因は、寄せ手は日向勢が主力で総大将が土持一族であったことによるものと思う。

